

フルーツトマトにおける色彩と味覚の違いに関する“やつけ”実験

トマトは、学名で *Solanum lycopersicum* といい、南アメリカのアンデス山脈高原地帯（ペルー、エクアドル）原産のナス科ナス属の植物である。多年生植物で、果実は食用として利用される¹⁾。その中でも、小さく甘みの強い高糖度化をはかったトマトのことを、フルーツトマトという¹⁾。

今回、本サークルでは、このトマトを栽培する機会を得た。なお、植え付けた日付は5/2（植いき新聞 第8号参照）であったため、本日で約6か月以上経過したことになる。トマトの収穫の最盛期は一般的に夏ではあるが、今回栽培したトマトは現時点でも多く収穫され、丈夫な発育のトマトといえるかもしれない。

本日は赤い実のものから赤実がかったものまで、合わせると8個も収穫することができた。そこで、今回はこの時期に貴重な8個のトマトをただ食するだけではなく、これら8個のトマトに焦点を合わせ、トマトの色彩と味覚が個人間でどのように異なるのかを調べた。

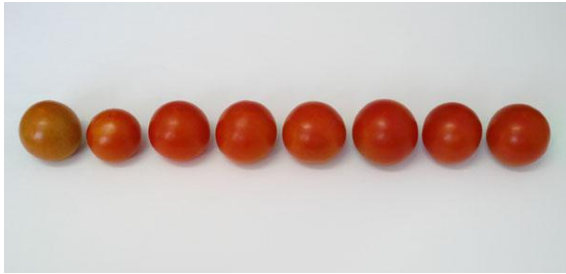


図1 本日収穫されたトマト

本日収穫したトマトを図1に示す。

大きさはやや差があるが、直径は約3~4 cmであった。被験者4人（S1~S4）に対して、まず色彩の違いをみるために、これらをそれぞれA~Hと識別し、コップに入れたトマトをランダムに濃い順に並び変えてもらった。S1: ABCDEFGH、S2: CBAEDFGH、S3: BCAFEDGH、S4: BCAFDGEHとなった。GHは一致したが、その他は異なった。しかし、ABCは上位に、DEFは中間位に位置し、著しい個人差はなかったことが分かる。

本日のトマトの色彩は図2によればR4~O2となり、色の抽象的連想を調べると、トマトは情熱~陽気のような印象が得られることが分かった（まさにトマトは夏っぽい（夏野菜））。

次に味覚の違いをみるために、4分割したトマトをそれぞれの被験者に食べてもらい甘いものから順位をつけてもらった。S1: AFECBDGH、S2: AFGEHBDC、S3: FDBAHGEC、S4: EGFADBCHとなった。味覚に関して個人間でかなり異なり、特に規則性が認められなかった。すなわち、トマトの甘さは個人によって趣向があるということだろうか？ 色彩との関連も特にないようであった。

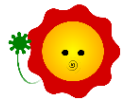
今回、トマトを通して、ただ食するだけでなく、実験をしながら、4人で楽しく食べることができた。食べられたトマトも、植え付けから栽培、収穫、さらに実験までと盛りだくさんのトマト企画に、喜んでいるかもしれない³⁾。いや、喜んでいると思いたい。

1) トマト: <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%88%E3%83%9E%E3%83%88>. (閲覧 2014.11.4)

2) 色彩カラー研究所: <http://www.ts-depot.com/color/color/basic04.html>. (閲覧 2014.11.4)

3) 小原田泰久: 植物と会話ができる! 廣済堂出版. 2007.

植いき新聞



植物いきいきサークル

第29号

発行者: 犬丸、上木、
岩山、O

【CCICの色相関】

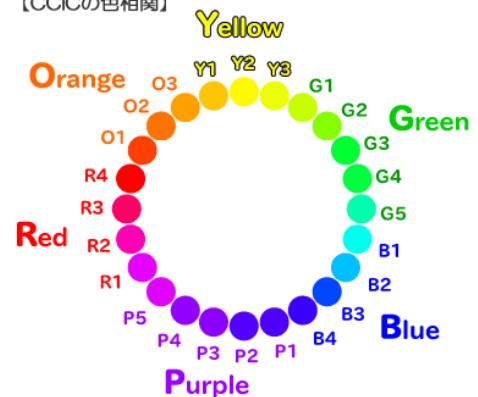


図2 CCICの色彩体系²⁾